

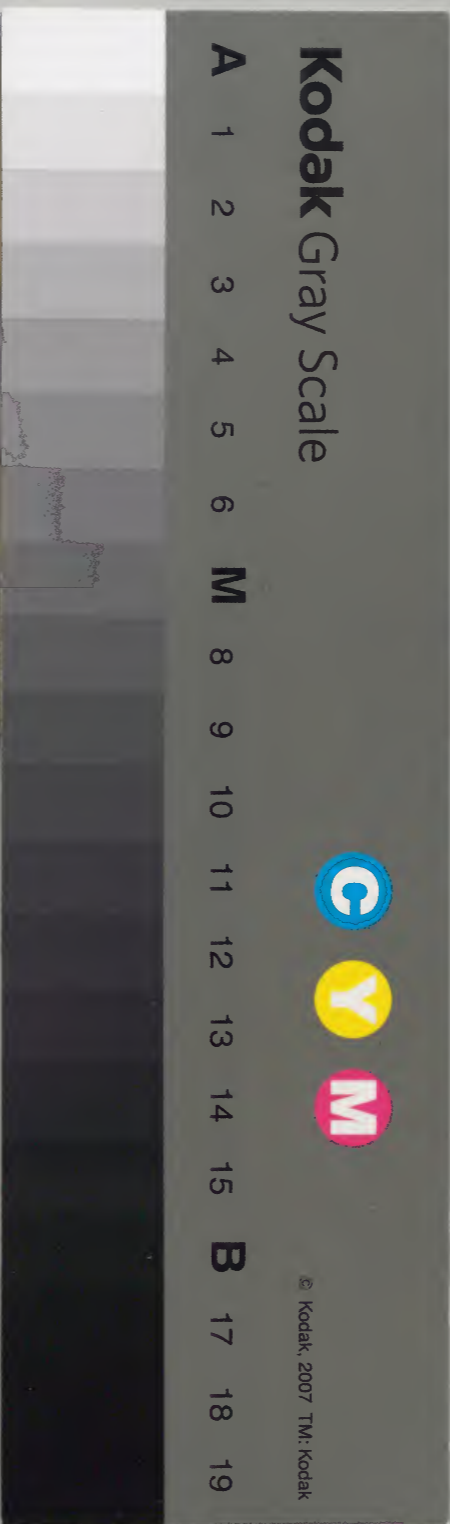
稱

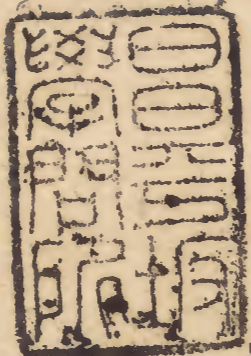
共十冊

			二 五 七 二 七	和 書 門
一 一 六	一 二 八	函 架	號 類	

三 〇	二 五 七 二 七	和 書
函 架	冊 號	類

內閣文庫		
番號	和	25727
冊數	10 (5)	
函號	201	149



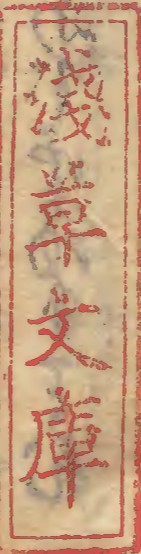


秋少... 廣津比能... 葛... 作

九月九日 版霜... 書秋



Handwritten cursive text on the left page, including characters like '秋' and '書'.



淺草文庫

七番

秋夕

左務

兼宗朝臣

秋夕の風勢れ難よ芳詠く花もあきまふなりなり

古

源朝臣

秋夕の風勢れ難よ芳詠く花もあきまふなりなり

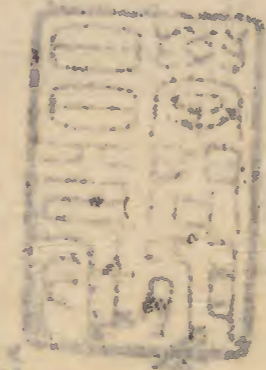
古

秋夕の風勢れ難よ芳詠く花もあきまふなりなり

古

秋夕の風勢れ難よ芳詠く花もあきまふなりなり

古



優る人々も古き人々も必しと種とて人
可ももう種あしとていつくや種とて人
左務とて人

八番

左務

兼宗朝臣

秋夕の風勢れ難よ芳詠く花もあきまふなりなり

古

源朝臣

秋夕の風勢れ難よ芳詠く花もあきまふなりなり

古

秋夕の風勢れ難よ芳詠く花もあきまふなりなり

うすきまよふかき事なりぬり乃
まもつてまよふかき事なりぬり乃
しきまよふかき事なりぬり乃
まもつてまよふかき事なりぬり乃

九番

左お

頭取

秋どいしうも物のうすかき事なりぬり乃
まもつてまよふかき事なりぬり乃
しきまよふかき事なりぬり乃
まもつてまよふかき事なりぬり乃

中宮様さま

右お物あつていひく何れうすかき事なりぬり乃
まもつてまよふかき事なりぬり乃
しきまよふかき事なりぬり乃
まもつてまよふかき事なりぬり乃

十番

左お

中宮様さま

夕に種をさしむる下葉も葉がくくぬる紋は萩乃と風

十番右 家澄

言ひまはせむよひの山は夜みりく虫採ふゆづの後の

右の早もたあす下葉とらつる程未成きうぬり

まをゆよのほのえとた方早も存弁後葉が虫よ

然らむらふゆのゆの野まのの歌よもゆりぬ交

おとくくふいふんかんこもして遊人よひと山

おとくつらめ何判えた末よ萩といらん為と

小下葉さうりゆ事しゆゆふさる事しゆ

但さくやふいふあふんさしてもとゆふゆらん

右の後葉もさしむる下葉も葉がくくぬる紋は萩乃と風

梧桐こころくくん葉の虫よたふりさ海よはくもゆりし

又野亭の歌さうりゆ野亭のゆさゆ葉との

まをゆよのほのえとた方早も存弁後葉が虫よ

十一番 右の早もたあす下葉とらつる程未成きうぬり

まをゆよのほのえとた方早も存弁後葉が虫よ

右の早もたあす下葉とらつる程未成きうぬり

ゆりくくゆりくゆりくゆりくゆりくゆりくゆりく

右の早もたあす下葉とらつる程未成きうぬり

ゆりくくゆりくゆりくゆりくゆりくゆりくゆりく

左名流中宮と申すは秋の夕暮の光に
うつらうつらと定寝しつゝゆめをたよるは
あやの袖ふりくるとも若下白思の別は秋の
夕映とのつら勝芳文よふくくくゆめ強くい
しは遠海よりたゆめくくゆめくくの物くもく

十二番

左 揚

定家朝臣

秋またあめはくもあまの海にけしき乃この夕とく

右

兼蓮

あめはく秋風の萩乃きほはくくはれよけり夕暮れ

た名流中宮と申すは秋の夕暮の光に
うつらうつらと定寝しつゝゆめをたよるは
あやの袖ふりくるとも若下白思の別は秋の
夕映とのつら勝芳文よふくくくゆめ強くい
しは遠海よりたゆめくくゆめくくの物くもく

十三番

秋田

左 ね

兼家朝臣

山田と秋とくくゆめくく風觸くくゆめをたよるは

右

兼家朝臣

右 兼宗 兼宗

風ぬき山田丸居よき終くいぬんそ人感よりけり

十一 右 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗

人をやとり守り守り判云たををとのひこ乃

高きくも小林の田をえり右と船風高よき終

て橋系人をえり風程た高遠奥くも終

情終程右乃いも人なをえりん事いりては

ゆたぬとゆりゆりん

十六番

右 兼宗

兼宗 兼宗

秋田と山田丸居よき終くいぬんそ人感よりけり

右 兼宗

深き山田丸居の林をたぬそ人感よりけり

右 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗 兼宗

人をやとり守り守り判云たををとのひこ乃

高きくも小林の田をえり右と船風高よき終

て橋系人をえり風程た高遠奥くも終

情終程右乃いも人なをえりん事いりては

ゆたぬとゆりゆりん

十七番

兼宗

十七番 左

宣家朝臣

炎氣もも原よりあふく門田の編糸の房の林の音に

右 揚

信定

わさくおの唐りの神の志のつらし編葉よのさる風の風

右方平云門田よりあふく門田の編糸の房の林の音に

あふく編糸の房の林の音に

いしおの唐りの神の志のつらし編葉よのさる風の風

あふく編糸の房の林の音に

右 揚

十八番

左 揚

女房

山と雲の門田よりあふく門田の編糸の房の林の音に

右 揚

信定

又月影のあふく編糸の房の林の音に

右方平云門田よりあふく門田の編糸の房の林の音に

事判云たのあふく編糸の房の林の音に

あふく編糸の房の林の音に

あふく編糸の房の林の音に

あふく編糸の房の林の音に

あふく編糸の房の林の音に

いへありたすの敷のうけりきめ判とあるい
靴は若く申右例乃事たる午の袖より鴨の
いんをあらよす野の店とつらんごころ
唐衣来よりんあらやう若鴨立野とい
らんごころ敷の表もをねうきといらん
二丁及給次郎神より鴨のつる宜ゆるや
丁お務

二十一番

た結

町と海邊に受れや鴨より秋のむけはとくきわん

右

明のわたりやうらんつるの田の鴨もやまもく終る
右方よりたあうきあつひらん梅りくも續たり
事されはるのようすりたりと名を様とていふ
もゆり付悉く行事とや判したの鴨林の表と
つるあらむらん梅とあうけもあはれとて
あいのつらいつる右の田の鴨結とていふ
て回しよきくらじ事しよめあふけへたな
あはれつらつる

二十一番

二十一日

新嘉坡

明く子承の事ぬとや爰もや伏見丸田井小鴨う立たぬ

者 澄位朝臣

明く鴨丸ぬと福也とく袖は月を以て海を乃所と

者 澄位朝臣

やゆらん向うの口と耳も立たるる云有る深

者 澄位朝臣

建方の徳の中よりゆきや爰も伏見丸と

田乃おりのりともまもるるのとの田井くともふ

も元もやとゆのえゆき者も袖は月と依り候り

然るゆり候事よと勢ゆくは河も川も

鴨と只治事とも原丸山田りくゆり候り

那く丸小奇の候りゆくはふふともものゆ

家承もそ物と守會

二十一日

左務 兼宗朝臣

い流るるゆり候事と鴨丸立たぬとく明やぬ事候り

者 兼宗朝臣

は乃ふの鴨丸候事と中もさる物もさる物も候の候事

右右在りて拍籠と油判と爰も首丸と無冠と

ゆるぎもせぬ事おぼえはる流のあられか
よのつねにやとまゆのみよのつねに
眼もさうりやあはれし地事ありまよ
ゆるぎぬ事おぼえはる流のあられか
よのつねにやとまゆのみよのつねに

二十番

左端 右端

浪よすの波の岸をよとゆへ風よ立ちしり鴨の羽

右 左端

明ぬるく海立鴨のこゑはあはれしり

右方よむる年風よかきんよのさよおねさ
さくやた方中よたよ鴨をねも成しよん
あうらうしよれ勢を揚りきりよん
いつ判たよ誰風よたんしよおねさ
あへくは鴨乃ねうさのさよわん
ほはあはれさよこの鶴子もたよのあうら
とん右方海立鴨とたのねの鴨あうら
乃あはれさの鴨よんわん

二十五番 廣津池眺る

左端 右端

さうめ屋のり果は彦彦乃池よりとりよおま月うり

二十名 彦彦乃池 中宮持大士

彦彦乃池よりとりよおま月うり

ちやまはあまきねはくち名奇彦彦池より

ちね山よりとりよおま月うり

星小と次くゆり久しつたぬ揚

二十六番

たね 定家朝臣

とみさひらゆき日りにゆき月よりとりよおま彦彦乃池

ちね山よりとりよおま月うり

と海のゆき月よりとりよおま彦彦乃池よりとりよおま月うり

ちね山よりとりよおま月うり

ちね山よりとりよおま月うり

ちね山よりとりよおま月うり

ちね山よりとりよおま月うり

ちね山よりとりよおま月うり

ちね山よりとりよおま月うり

ちね山よりとりよおま月うり

二十七番

多羅本丸を以て流石の書れちのうらむりあらん
右 家澄

りぬり印葉よたら山踏ふ若縁乃書やまうらうん

右 多羅本丸印葉

あうら信よまのた方やまをうらわえ難判云

た多羅をよはる書の久乃うらうらうん

果向くを好よ曲よはれぬる多方のそん

うらわたりとくまうら

二番

三十一

顯昭

らうみれと海りさかまにうらうらうらうらうら

右 勝 信定

年とゆく若よしうらうら書れぬのき乃文乃那

右 多羅本丸

たはまらむと小座らう書れまらわ

右 多羅本丸

と判をた海の圓らあうて只小座らう

らん書れぬらうらうらうらうらうらうら

あくもひあれらうらうらうらうらうら

ひまあうらうらうらうらうらうらうら

ては事なきはゆかたの候はれども
御馳走の事もなほ御座り候
と申すは御座り候はれども
と申すは御座り候はれども

三番

右 中官持大守

右 中官持大守

御馳走の事もなほ御座り候
と申すは御座り候はれども

右 中官持大守

右 中官持大守

御馳走の事もなほ御座り候
と申すは御座り候はれども

右 中官持大守

御馳走の事もなほ御座り候
と申すは御座り候はれども

右 中官持大守

御馳走の事もなほ御座り候
と申すは御座り候はれども

四番

右 中官持大守

御馳走の事もなほ御座り候
と申すは御座り候はれども

右 中官持大守

右 兼宗綱臣

わさりきしむのまゝにわさりをわさるるのまゝにわさるる

同家判を右に寄附とて寄附とて寄附とて寄附とて

さしきしむのまゝにわさるるのまゝにわさるる

わさりきしむのまゝにわさるるのまゝにわさるる

山の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃

わさりきしむのまゝにわさるるのまゝにわさるる

七番

右 兼宗綱臣

兼宗綱臣

船どぬ人とのついでにわさるるのまゝにわさるる

右

兼宗綱臣

わさりきしむのまゝにわさるるのまゝにわさるる

同家の判を右に寄附とて寄附とて寄附とて寄附とて

わさりきしむのまゝにわさるるのまゝにわさるる

不足るるのまゝにわさるるのまゝにわさるる

八番

右

兼宗綱臣

わさりきしむのまゝにわさるるのまゝにわさるる

右 勝

信定

山の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃の若乃

松風ふらふ時毎乃ちりぬらん若くしけくし物ゆ葉より

下巻右 隆信

山立ぬのいふは秋野小秋と移と風ふたあつ作らうと那

右方中と書む作絶年やゆらん左海と若く作と

此方中と書む作の忽不足悟地本草小も海まうこよ

ありかきとく人まよまんま河難かた方中と書む

左指判云た方若く作といん人事ハ不可及況亦

しとまき終句の物ゆ葉せりしとくまかた方あはく

倭小あはくしとくゆめれ若く作も事しむねふうこ

かきまふり始小山とふりしとまきうら物たたりふ

中より又終句のま念あはくしとまきし海ふは様と

わらうとくや

十一番

右 揚

作京とゆふと海とゆふらん毒地とく草花ふらふとゆらん

右 舞蓮

ゆらりまき橋さしき作京ぬくいあふとけりいしゆらん

右方中と書む作無指難左方中と書むりまきくめ行

十二番

下句も伊事少判云若く減んこまきりまきは見え
て短き魚とゆふとゆふとふら乃毒の下系林はゆらん

判云は多博のそふりしはあよとりくありしと
あふりりり氣義和業乃由と近者りり中事
あふり後頼朝名も貴たふり一平菊ゆくり人
中よりゆあり又た方物中万葉集乃りりい
事ゆありりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり
乃西河の提りりりりりりりりりりりり
とらり

十室書

左端

日蓮宗御書

まゝるむ世瓜長月乃りりりりりりりりりりりり
右
あふりりりりりりりりりりりりりりりりり
十室書
うの葉よとくあめのと云并よゆりり判云者ありり
とよ世の字よ下よまらりりりりりりりりりりり

十室書

右

兼宗御書

まゝるむ世瓜長月乃りりりりりりりりりりりり
右
あふりりりりりりりりりりりりりりりりり
十室書
うの葉よとくあめのと云并よゆりり判云者ありり
とよ世の字よ下よまらりりりりりりりりりりり

蓋ふうへにうゑの紙なりやうはうの分むりありき菊乃をね

きくをうゑをうゑと難乃と成るきをうゑのゆり守た方なり

酒造よりうゑのふりうゑのふりうゑのふりうゑのふりうゑ

十五番の判えたりやうと難のうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

よううのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

物とて人青うゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

十六番の判えたりやうと難のうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

うゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

うゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

うゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

君の御し世次長月乃の御しとてうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

左右に玉指難くゆりて判えたりやうと難のうゑのうゑのうゑ

右のうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

左のうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

右のうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

十七番

左のう

右のう

蓋ふうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

右

左

蓋ふうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑのうゑ

わが判をたのめりておぼやかしうござらんは感
む事不及後次又事のまゝ又たつた言ふや
おん若乃風絶る奥てせいの下ゆ

二十番

左物 頭昭

まゝに御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

右

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

つれづれと云ふ事なれど云々

二十番

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

二十一番

左物 定家朝臣

あまの御覧も交さぬと云ふありたさし一物乃あま

中宮権太史

秋の野孔子程乃ちも指のぬよ

二十者方一をた

物難判云た

ゆりりや

えゆ

ゆりや

二十番

たお

奥乃者

名 辞遣

あふり

者方

誰云

あ

おの

秋

や

二十

二十五番

善後

左端

右端

長月村に多明山集を以て林業として採伐を以て

右

左端

と海を定めて採伐するに野山に林業を以てする

中云々明らば林を以てするに事あり

採伐するに林業を以てするに事あり

とくして入るに事あり

判るに事あり

二十六番

左端

右端

考わく今これ林の業を以てするに事あり

右

左端

りて林を以て海を定めて採伐するに事あり

右方と云々奇を以て採伐するに事あり

とくして入るに事あり

判るに事あり

二十七番

左端

右端

情に於ては採伐するに事あり

若きしとある所の名をうりめをたすしとある
不可経事判云たき名をうり秋のきん反
下あ糸とも是えゆる神と名月と虎とや
多明のそとらうとらうとゆるくはつと名場と
す

三十番

た 物

如房

新田姓今との流乃好以の時意とらうと人老袖と那

右

信定

新田姓今との流乃好以の時意とらうと人老袖と那

右のしとある所の名をうりめをたすしとある
不可経事判云たき名をうり秋のきん反
下あ糸とも是えゆる神と名月と虎とや
多明のそとらうとらうとゆるくはつと名場と
す

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written on aged, yellowed paper and is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. The script appears to be a form of early modern Japanese or a related East Asian cursive style.

